

令和元年6月27日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02453

研究課題名（和文）1940年代前半期朝鮮における金鍾漢の二重言語創作と「国民文学」の展開

研究課題名（英文）Development of Kim Jong-Han's dual language creation and the "National Literature" in the early 1940's Korea

研究代表者

藤石 貴代（FUJIIISHI, TAKAYO）

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：20262420

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：1940年代前半期の朝鮮半島で唯一、発行を許可された月刊芸誌『国民文学』（1941.11～1945.5通巻39号）誌の編集者であった金鍾漢、および同誌主幹の崔載瑞（1908-64）が主張した「国民文学（論）」について、日本帝国主義に対する抵抗か屈従（親日）かの政治的二項対立からの評価ではなく、朝鮮文人たちの朝鮮（語）文学存続のための試論として捉え直した。調査の過程で、崔載瑞の恩師であり、英文学者で詩人の佐藤清（1885-1960）と、新潟の詩人、浅井十三郎（1908-56：本名、浅井与三郎。のち、関矢与三郎）との交流が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本内地の「地方」においても、戦時体制下の文学革新運動として「国民文学（論）」が推進された例を、戦前から戦後にかけて新潟で発刊された詩誌『詩と詩人』（1939-57）の調査により確認した。同誌編集者の浅井十三郎と金鍾漢に共通して見られる「（新）地方主義」「史詩」を検討することで、朝鮮半島における「国民文学（論）」に限定されない視野と視点の拡大を得た。日本現代詩史の観点からも、『詩と詩人』は、戦後いち早く浅井が創刊した『現代詩』（1946.2-1950.6）とともに、「戦後詩の原点」と称される『荒地』や『列島』に先駆けて戦後詩の母体となったことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：Kim Jong-Han, who was the editor of the monthly literary magazine "National Literature" (1941.11- 1945.5), it was authorized to publish in the early 1940's, insisted "National literature". It deserves an evaluation rather than the political binomial confrontation of resistance or excuse against Japanese imperialism, but as a struggle for the continuation of Korean Korean (language) literature. In the process of the investigation, the relationship between the Kiyoshi Sato (1885-1960) and the Japanese poet Juzaburo Asai (1908-56 real name, Yozaburo Sekiya) who lived in the Niigata region, became clear.

研究分野：人文学

キーワード：金鍾漢 国民文学 国民詩 愛国詩 新地方主義 則武三雄 浅井十三郎

1. 研究開始当初の背景

(1) 朝鮮近現代文学史において「国民文学」という用語は、植民地時代末期のいわゆる「親日(=対日協力)文学」としての「国民文学」を指すのが一般的である。解放後、大韓民国(以下、韓国)での先駆的な研究として、1966年に『親日文学論』を著した林鍾国(1929-89)が「親日文学」を「主体的条件を喪失した盲目的時代主義的な日本礼賛と追従を内容とする文学」と定義したが、既に1948年の時点で、「親日(派)」とは「日本の戦勝のために誠心から助力した戦争協力者」、すなわち売国奴を意味した。そのため、国民文学に代表される1940年代前半期の文学は、朝鮮近現代文学史の「暗黒期」「空白期」として黙殺されるか、「抵抗か親日か」という尺度から断罪される対象でしかなかった。

しかし、1990年代以降、韓国で林鍾国の遺志を継ぐ研究者たちが、反民族問題研究所(現「民族問題研究所」)に集って膨大な『親日人名事典』編纂作業に着手し、歴史学分野で日中戦争期から太平洋戦争期にかけての朝鮮人の「転向」「親日」についての研究が進展するなかで、文学研究においても親日文学への関心が再浮上した。特に大きな契機となったのは、生前たびたび親日的行為を追及された元老詩人、徐廷柱(1914-2000)の死去と記念館設立是非をめぐる議論である。季刊『実践文学』(2002年2月)、『韓国近代文学研究』(2003年4月)等の学術誌が親日文学特集を組み、かねてより日本「外地」文学資料を収集・刊行してきた金在湧によって、親日文学は林鍾国の定義のように「日本語執筆」「御用団体参加有無」「(日本式氏名への)創氏改名」によって測られるものでなく、「反復(継続)性」と「作者の内的論理の一貫性」を検証せねばならないとする、新たな分析の視角が提示されることとなった。

(2) 本研究の中心軸となる金鍾漢(1914-44)については、日本語版『親日文学論』(1976年、朝日新聞社)の翻訳者である大村益夫(1933-)によって初めて金鍾漢の思想・作品に迫る論が書かれ(「金鍾漢について」『旗田巍先生古稀記念朝鮮歴史論集下巻』龍溪書舎、1979年、467-490頁)、さらに、研究代表者が伝記・書誌的事項を補完して、金鍾漢を朝鮮近代文学史上に位置づけた(「金鍾漢論」『九州大学東洋史論集』17輯、1989年1月、157-222頁)。拙論執筆当時、日本文学研究者による専論は、川村湊(1951-)『「酔いどれ舟」の青春』(講談社、1986年。のちインパクト出版会より再刊、2000年)が唯一のものであった。

2005年に、研究代表者は『金鍾漢全集』(大村益夫・沈元燮・布袋敏博・藤石貴代編、緑蔭書房)を刊行したが、これにより、「親日(派)」としてではなく、二重言語作家(詩人・評論家)としての金鍾漢の文学的営為が、韓国の新しい世代の研究者のみならず、日本国内の日本文学研究者からも注目されるようになった。

2. 研究の目的

金鍾漢は、所謂「親日文学」を主導した月刊文芸誌『国民文学』(1941.11-1945.5)の編集に携わり、日本語詩「園丁」(1942)が代表的な「親日」作品と見なされたことから、朝鮮近代文学史の埒外に置かれてきた。しかし、多量かつ多彩な彼の日本語創作の意味と意義に着目するならば、日本近代文学史にも正当に位置づけられるべき詩人・評論家である。

戦後の冷戦構造のなかで形成された日本もしくは韓国という一国文学史を越えて、「帝国」日

本が企図した「国民」による「国民文学」とはいかなるものであったか、金鍾漢を手掛かりとして、その実像の一端を明らかにするとともに、日本と朝鮮、及び戦前戦後の近代文学史をつなぐ重要な詩人・作家として、金鍾漢の作品世界を考察する。韓国の研究者からは「なぜ日本の学者たちが（中略）金鍾漢の親日を擁護までしながら、膨大な全集を出版したのか。事実、日本側から見れば、彼ほど好感を与えてくれる作家も珍しいだろう」（パク・ホヨン「金鍾漢研究」『韓中人文学研究』2006年4月、251頁）との厳しい指摘がある。しかし、日本側の「彼の親日の態度が考慮の余地があると判断し、彼に対する再評価を願う意図」（同上）を、韓国側としては受け入れがたいとしながらも、金鍾漢の文学活動についての「総合的な整理が必要」という点では、両国研究者の見解は一致している。

3. 研究の方法

韓国では、尹海東が「抵抗か親日か」という二分法では捕捉不能な「植民地認識のグレーゾーン」（『現代思想』31巻6号、2002年5月）に着目し、日本でも「対日協力こそが、植民地期の大方の朝鮮人と『近代』との具体的な接触の場であった」（並木真人「植民地期朝鮮政治・社会史研究に関する試論」『朝鮮文化研究』6、1999年3月、114頁）とする見解が現れるようになった。「親日文学」研究においても、作品から「植民地権力に対する共謀と抵抗が共存する様相」（洪宗郁「植民地朝鮮の『転向』に関する序説」『朝鮮半島の言葉と社会』明石書店、2009年、627頁）を読み取るうとする方法が主流になった。

「国民文学（論）」の存立が朝鮮半島に限定されるものでなく、日本内地の「地方」においても、変革を余儀なくされる戦時体制下の文学運動として把握された例を、戦前・戦中・戦後を通じて新潟で発刊された詩誌『詩と詩人』の調査を通じて確認する。特に、地方から大政翼賛会や放送局に「献納」された「愛国詩」の朗読運動に着目し、当時の日本「内地」と「外地」における「国民文学」の展開過程を、同時代的な文学運動として跡づける。

4. 研究成果

（1）研究代表者が書誌的な研究（作家・作品年譜の精緻化）に取り組んできた金鍾漢について、在朝日本人作家による同時代評に着目した。特に、則武三雄（1909-90：本名、一雄）については、田中英光『酔いどれ船』（小山書店、1949年）に登場する、主人公・坂本享吉の友人「則竹」のモデルという先入観を排するとしても、平安北道警察部警務課巡查、朝鮮総督府警務局保安課嘱託という特異な経歴が記録を可能にした紀行文集『鴨緑江』（初版1942年、朝鮮印刷株式会社、増補版1943年、第一出版協会）の刊行や、17年に及ぶ在朝期間に白石（1912-95）、徐廷柱（1915-2000）など朝鮮の詩人たちと交友した記憶を晩年まで書き続けた点で、稀有な時代の証言者であると言える。

（2）『国民文学』主幹である崔載端（1908-64）の恩師であり、英文学者で詩人の佐藤清（1885-1960）と、新潟の詩人、浅井十三郎（1908-56：本名、浅井与三郎。のち関矢与三郎）との交流が明らかになった。浅井は「愛国詩運動」としての「朝鮮の“国民詩歌”」に関心を寄せたが、朝鮮文人報国会の機関誌『国民詩歌』は、後に『国民文学』と同じ発行所から『国民

詩人』として刊行されることになる(1944年10月)。また、浅井の「国民文学と地方語の問題」(『詩と詩人』1941年2月)からは、「国語」創作の問題が、朝鮮人や台湾人における民族語との関係のみならず、内地(日本)人作家においても「標準語」と「方言」表記の葛藤をもたらしたことが読み取れる。

(3)「地方文化の展開のために」『詩と詩人』(1942年1月号)、「時評民族詩の第二段階」『詩と詩人』(1942年2月号)等において、浅井十三郎が「大東亞戦争前後の短時日を劃して國民詩の興隆は誠に喜ばしい現象であつた。」「(前略 引用者註)『人間像』の創造については新たな倫理と生活の能動的性質言ふならばその意志と目的を失ふことなき人間のその『場』に沈潜する必要を感じるのである。」と述べていることは、「新しき史詩の創造」(『国民文学』1942年8月号)を主張した金鍾漢との比較において、注目に値する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

藤石貴代、則武三雄と『國民詩人』について、東アジア:歴史と文化、査読無、Vol.26、No.1、2017、pp.1-13

〔学会発表〕(計2件)

藤石貴代、愛国詩と「史詩」、浅井十三郎生誕110周年記念シンポジウム(新潟大学「声とテキスト論」研究センター)、2018

藤石貴代、戦争詩・愛国詩・国民詩、浅井十三郎の詩と生涯シンポジウム(新潟大学「声とテキスト論」研究センター)、2019

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。